



PARCO STAGE より

月の上の夜

渡辺えり

登場人物

時子・姫

アツ子・ソラリス

みどり・侍女ダーマ

茂男・遠山

立花・王子

君恵・月よりの使者

バラ子

ユリ子

「月の上の夜」

一面のチューリップの丘、薄桃色の花びらがそよ風に揺れる。
高音がやけに響くような、乙女特有の笑い声が聞こえてくる。
青空の下、その声は人となって現われた。

バラ子

ここにいたしましょう。

ユリ子

あら、あの林の先の湖まで参りましょうっておっしゃってらしたのに。

バラ子

だつてごらんさいな、なんて見事なんぞございましょう。

どなたかのおやしきのお庭でもないのに、どうしてこの丘にだけ咲いているのかしら。
不思議ですわ。チューリップって野に咲く花じゃなくなつてよ。ユリ子さん、そうでございましょう？

ユリ子

ええ。

バラ子

まるで私達が来るのをここで待っていて、それに合わせて突然に花開いたように咲いているのですもの。ほんとに可愛らしい。それにもう、お昼をとづくに回つてしまつたわ。ここでお弁当にいたしましょうよ。

ユリ子

バラ子さんにはかなわないわ。いつもお一人で決めになるんですもの。でも誰もそれにはさからえないの。バラ子さんは天性の魔法をお持ちなのね。

バラ子

まあ、ユリ子さんたら。そんなことおっしゃって。本当はもう歩き疲れて、この辺でちよほど休みたいって思ってたんでしよう？皆さんが私の言うことにさからわないのは、私がいつも皆さんの正直な心を言い当てて、すぐに口に出してしまうからですわ。私は皆さんより、少しばかり勇気があるだけ、それだけのことですわ。

ユリ子

あら？時子さん、時子さんがまだおみえにならないわ。お弁当はあの方がお持ちなのよ。どうなさったのかしら。

バラ子

そのうちにいらつしやるでしょ。それまで、お花をつんでいきましょうよ。

と二人「アンニーローリー」をデュエットしながらチューリップをつみだす。

そこへ、三人分のお弁当と水筒、そして花ゴザや日傘等を抱えた少女が、フーフー言いながらやってくる。

時子

お、遅くなってしまつて……

二人

あら、時子さん、ずいぶんと待っていてよ。いつの間にはぐれたのかしら。

時子

ええ、ちよつと荷物が……

二人

荷物が？

時子

いえ、重いという訳ではありませんの。重くて、疲れて、足がフラツいて、遅れてしまったという訳では決してないのですけれど……

と息切れがしている。

ユリ子

まだ、遠いのでしようねえ。湖までは……
バラ子さんが、ここでお弁当にしましうって。それ、広げて下さるかしら。早く座
りたいわ。もう三時間も歩き通しですもの。
ええ。ちよつとお待ちになつて……

時子

と荷物を置いて花ゴザをしこうとする。

ユリ子

アラ、それ下に置いてはいやですわ。昨日まで降つてた雨のせいで、地面がまだぬれ
ているんですもの。
ええ。

時子

と一人で苦労しながら敷き終える。

ユリ子

バラ子さん、休みましょう。

バラ子

ええ。

ユリ子

ああ、クタクタ。時子さん、お水いただけるかしら。
ええ。

時子

ユリ子 それからお弁当。ああ、その花模様のがあたくし。チェックのハンカチの方がバラ子さんのよ。

時子 ええ。

と、時子、フーフー言いながら準備する。

ユリ子 あら時子さん、そんなにお疲れなの？

時子 え？

ユリ子 あなた御自分でおっしゃったのよ。「私は力持ちだから皆さんのをお持ちします」って。ねえバラ子さん、スミレさんが転校なさって、バラ子さんとあたくし二人きりのグループになってしまつて、寂しいことねってこぼしていた時、よかつたら代りに私をお仲間に入れて下さいましておっしゃったの、あなたよ、時子さん。

バラ子 ユリ子さん、およしあそばせ。ですから時子さんだって荷物を持つとうなんておっしゃったのよ。時子さん、これからは遠慮なさらず。もつと自由になさいな。ユリ子さんだって、いじわるでおっしゃってるんじゃないよ。あなたがひどくお疲れになつている御様子を見て、自分達がまるでいじめているように見られるのがたまらなくて、悲しくて、それでかえつて、あなたにきつく当っているだけ。ユリ子さんて、とてもお優しい、いい方なの。お判りになつて？時子さん。

バラ子さん……。

時子

とうつとりとバラ子を見る。

バラ子
ほんとにあたくし……ごめんなさいね。よかれと思つてしたことが、かえつてお二人を傷付けてしまうなんて。……あたくし、ただ、お二人に嫌われたくなくて……
まあ、可愛い方。ユリ子さん、もう時子さんを許してあげて、ネ。さあ。

とユリ子と時子の手を取つて互いに握にぎらせる。

これで仲直りよ。お弁当を食べましょう。

と、自分の包みを開けてサンドイッチを取り出す。

ユリ子

ええ。

ときれいな形の巻き寿司を広げる。

二人ともニギヤかなオカズを別に持っている。

時子、二人の豪華な弁当を見て、ハツとする。

バラ子

あら、時子さん、召しあがらないの？

時子 いえ、あの。

ユリ子 バラ子さん、ゆで卵召しあがる？お母様が沢山つくって下さったの。

時子 (心の声) ゆで卵!!!

バラ子 まあ、ありがとう。私のバナナも召しあがれ。

時子 (心の声) バナナ!!!

ユリ子 時子さんは何をお持ちになつて？

時子 あの、あたくしは……

と弁当の包みをかくす。

バラ子 まあ、大きなお弁当、おいしいものが沢山詰まつてるのね。

時子 いえ、あの、その。

ユリ子 おかしあそばせ。

時子 いえ、あの、その。

ユリ子 おかしなさいな。

と、いたずらっぽく無理矢理取りあげて、バラ子とともに包みをあける。アルマイトの大きな弁当のフタを開けると、隅に縮んで固まったごはんの真ん中に、梅干が一つ入ったきりだ。

二人

まあ！

時子

あの、その、あの、その。

バラ子

時子さんあなた。おかずにどこかに落として来てしまったのじゃなくて？

ユリ子

ほんとう、せつかくのお弁当なのに、おかずになくちや召しあがれないわね。

時子

……はいつ！（まさか薄く押し込んだごはんがスミに片寄っただけだとは言えない）

ユリ子

どうぞ、ゆで卵。

バラ子

こちらのカラ揚げもどうぞ、よろしかったらバナナも。

時子

……

涙ぐんでいる。

バラ子

いやあねえ、おかずに落としたりぐらいでお泣きになって。よっぽどの好物が入ってたのね。

時子

……ええ、この世の測りでは測れぬほどの大きなお魚と、ゴツホの「ひまわり」よりも黄色い玉子焼きと、目には見えない母の愛とが……そしてお二人に召しあがっていただこうと思っただけで、聖母の乳より甘い、極上のクッキーも、みんなみんな落としてきてしまいましたわ。

二人

まあ……。

時子

暗い森のような深い穴ぼこにみんな、みんな。

二人

そんな穴ぼこあったかしら。

と今来た道を振りかえる。

時子

ええ、あつたんです。赤貧という名の穴ぼこが。

二人、顔見合わせる。

ユリ子

赤飯ならあるわよ、召しあがる？

時子

今はそんなシヤレにも乗れません。

バラ子

不思議な方。急にお暗くおなりになつて。

ユリ子

どうぞ召しあがれ、おいしくつてよ。

時子

いいえ。もうおナカいっぱい。

バラ子

あら、何も召しあがらないのに。

時子

いいえ、カスミのような美食をいただいて、さつきから吐きそうなくらい。

バラ子

まあ、食の細かい方。

ユリ子

ごちそう様。

バラ子

ユリ子さん、その小川に行ってみましょうよ。キラキラ光つてとてもきれい。

ユリ子

ええ。

と二人、立ちあがって駆け出そうとする。

時子 待つて！

二人 え？

時子 踏んだでしょう。

二人 え？

時子 今踏んだでしょう。

二人 ええ？

時子 踏んだ踏んだ。

二人 ……

時子 そこよ、そこ。

と走って二人の足元にかがみ込む。

二人 ……

時子 りんどうの花。

バラ子 あら、こんなところに、気が付かなかったわ。だってチューリップがあんまり見事なものだから。

時子 これはあたくしよ、誰にも気付かれず、ひっそりと咲いて、道行く人に踏みつけにされ、声も立てずに、じつとたたずむりんどうの花は、これはあたくしです。そして誰



89年初演より
りんどうの花を手に持つ時子(吉行和子)

をもうらまず、せめず、何の主張もすることなくひとりぼっちで静かにしおれ、死んで行く。なんて可愛らしい、なんていじらしい花なのかしら……。よくも、あたしを、踏んだわね。

と舞台を一人の女横切る。

女

母ちゃん！母ちゃああん！

女はノラ着姿で、かなりあわてふためき必死の形相。

バラ子とユリ子、とっさに女を見るが、時子の人の変わりようの方に興味がある。

二人

時子

時子さん、どうなさって？まるでお人が、人が変わった！

バラ子さんとユリ子さん、あなた方お二人の知的で愛らしいお姿に、私は以前からあこがれておりました。校内の誰彼に、紅バラの君、白ユリの君とうたわれ慕われるお二人が、私のような者の存在に気付こうはずはなかったでしょうが、せめて口さえきけたならば私は毎日胸をときめかせ、教室の片隅でじっとお二人をうかがっておりました。窓ぎわのバラ子さんの茶色がかかった細い髪の毛が風にソヨと揺れる度、ああ、この私が風になれたならば、春風にさえシットを覚え、体操の時間に、ユリ子さんの白くて長い足が飛び越えた飛び箱に、そつと頬をスリよせた日々もあつたつけ。ああ！私はピアノニストになりたかった。お二人ともお上手よねえ、ピアノ（とうらめしげ）

音楽の才能さいのうだけは私の方が上なのに。一個の生卵を五人兄弟で五等分して分け合うよ
うなうちの暮らしじゃ、ピアノなんて、とてもとても、買えやしないじゃありません
か。画用紙に書いたケンバンに幾度も涙を落としながら、歌ったお歌はこんな歌。

へ 幸せが空にあるなら

天使の翼を絵に書いて

マツチの炎で燃やしましょう

煙の翼の方角に

別な私が見えるでしょう

幸せが海にあるなら

雨の降る夜の公園で

傘もささずに泣きましょう

いつか流れて行く先に

別な私が見えるでしょう

二人

お暗いお歌。

時子、手にしたりんどうの花に見入ったまま、徐々に老け込んで行く。それは少女の

先の人生を映したフィルムを早回しで観ているような速度である。

時子

美しい湖ありて佳き姫棲みぬ。あやかしの術にて百年の眠りにつきぬ。巷に住みぬ一人のおとめ。日も夜も恋うる小さき胸。日は流れ月はめぐれど、なおも紅蓮ぐれんの焰のご

とく恋情さらに染しみて、今宵こそ、救わんと、時の鏡の扉を打たん。

二人

どうなさつて、どうなさつて、時子さん！

天然色の映画が突然モノクロに変化したように、色彩が変わり、所は病院の一室。危篤状態の時子がベッドの中でうわごとを喋っている。

側には若い医師立花進と看護婦石橋君恵。医師は脈をとっている。時子の汗をふく看護師。

君恵

先生……

……

立花

いえ……先生……

君恵

なんだ……

……

立花

御家族の方は？

君恵 まだです……

立花 んんん……

君恵 どうしました？

立花 間が持たん……

私もさつきからそれを。

立花 こういう時は家族の方が来てくれないと、本当に、間が持たない。もう死んじゃうと

判っている患者のその時をただこうして、待つというのはどうも。君なんか女だから、

探そうと思えばいくらでもあるだろ？仕事がさ。花びんの水を替えるとか、布団を直

すとか、髪をなでつけるとか、僕なんか聴診器当てたり脈をとったり、もうやるだけ

やっちゃって、いかんいかんと思いついづい考え事しちゃうよ。さつきなんか、

きのうテレビでみた「ノリダー」なんか思い出しちゃって、あやうくふきそうになっ

ちゃったよ。どうする？

君恵 どうしましょう。不謹慎ですわ。あたしなんかさつき、もつとすごいこと浮んできち

やって、ほんと……

なんだよすごいことって。

立花 やだ、言えませんわ、こんな時に。

立花 言えよ、言えないなんて言われるとますます聞きたくなっちゃって、気になっちゃっ

て、患者の手離しちゃうぞ、僕はこだわる質なんだ。

君恵 今日、金曜日でしょ？患者さんのうわごと聞いてたら、金曜定休日の電機屋のシャツ

ターの前で、百円均一の雑貨売ってるおばあさん思い出しちゃってさ。「安いよ、安い

立花

君恵

立花

君恵

立花

君恵

立花

君恵

立花

君恵

立花

君恵

立花

よ、百円だよ」ってお経みたいに独り言言ってるおばあさん。あたしついつい色んなもん買っちゃうのよ。そしたら去年の夏にカトリ線香買ったの思い出しちゃって。ホラ、先生、やけどしちゃったでしょう。あの時、あの時さあ。ホラ、ネ、アツツなんて裸のまま飛び上がって、ああ、おかしかった。バカ。

だから言えないって言ったのよ。

死にそうな御老人の前で、君は一体何を……アレ？君、少し太った？まさか……

大丈夫よ。一人で育てるから。

え？ ええ……ええ！

嘘よ、バカ。

驚かすなよ、僕は神経が細くて過敏な質なんだ。外科医の親父と産婦人科のおふくろの跡をつがなかったのだって、血を見ると吐くからなんだぞ。だから女は嫌いなんだ。

毎月血を流しながら、平気で食事のできる人間なんかみんなどつか鈍いのさ。

だったらHなことしないでよ！女が嫌いならホモになりやいいじゃん。

じゃんとは何だ、君は厚木生まれか。看護婦の仕事を何とこころえる。

もう家来ても入れないからね。

女は嫌いだが、性衝動はどうにもならん。君がどうしても必要なんだよ。

どうしようかなあ。

頼むよ、君しかないんだ。気易く抱けるのは、あとはみんな、手え出すとなぐられそう、緊張しちゃうんだよ。恐いんだよ、あがつちゃうんだよ。

君恵 結婚するまでよ。

立花 判つてるよ。悪いなあ、石橋君。

君恵 ホントあたしつて子供の頃から世話好きなのよねえ。生来の看護婦。看護婦の鑑よ。

立花 ……御臨終です。

君恵 え？（とあたふた）

立花 練習だよ。練習。家族が来た時に、声がかすれてたりしたらみつともないだろ？ここ一番という時に、この僕の声で、家族が泣いたり、黙ったりするんだぜ。余り重苦しい感じになつても、軽くなつてもいけないんだ。少し憂いを含みながらも、適度に事務的に。情緒はかくし味程度にふりかける。これが簡単なようでむずかしい。僕はこういうことにこだわるんだなあ。中学の時に演劇部の副部長だったこともあるけど、これはお芝居じゃないんだからね。感情を入れすぎてクサクなつちやつたりしたら、患者がほんとは死んでないんじゃないかなんて、家族が疑いを持つたら？リアルにリアルに、なに気なくね、「御臨終です」どう？君。いいと思いますけど。

ともう面倒だ。

立花 まだかなあ……

君恵 どつちが……

立花 え？

君恵 家族が来るのと、臨終とですよ。

立花 バカだなあ、君に「臨終です」って言うためにこんな練習してると思うの？客がこなくちや意味がないでしょ、客が。……僕の声は通るんだ。いい声なんだ。ウイスパーで喋っても千人には伝わるぜ。

君恵 パー？何それ？

立花 (ウイスパーで)「御臨終です」こんな声だよ。

君恵 なんだ、本人に聞かせたい時にわざとという陰口の発声じゃない。
立花 あっ。

と、息を切らしてノラ着姿の初老の女が飛び込んでくる。先ほどの女である。

立花 (ウイスパーで)君、来たぞ、来たぞ、いよいよだ。

君恵 聞こえないように言ってってば。

立花 声を通る体質ってのも不便だな。

女 母ちゃん、母ちゃあん！先生、あの……あの……

医者と看護婦、庶民のイメージの医者と看護婦にキリリともどる。

立花 娘さんですか？

女 はい、娘のアツ子です。

立花 間に合われてよかったですね。
アツ子 母ちゃん、ナニ？ナニ言ってるの？
立花 はあ……さつきから何か言ってるようですが、よく聞きとれなくて……
アツ子 もうやはりダメなんでしょうか。
立花 はあ……もうお年ですし、このまま静かに見送りましょう。
アツ子 母ちゃん……何？ なんだ？
時子 ……ユデ……ユデタ、マ、ゴ……バ、バ、ナ、ナ。
アツ子 ああ？ 何？ なにや？
時子 ユデ卵とバナナが食べたいなあ……
アツ子 ゆで卵とバナナ？ 先生。
立花 なんでも好きなものを食べさせていいですよ。でも、何もたべられないとは思いますが……
アツ子 看護婦さん、ごごさあつべが。
君恵 配膳室で貰ってきましょう。
アツ子 ありがとうございます。お願いします。
立花 君、いそいで。
君恵 はい。

と出ていく。
女、泣く……

立花

アツ子

どうしたんです？

母ちゃんが悲しくて、今、死ぬって言う時に、ゆで卵とバナナなんて言う、母ちゃんが悲しくてえ。ビフテキとか、寿司とか言ってくれたら……母ちゃん……

立花

うわごとですからね、気にしない方がいいですよ。僕も何度か、こういう時に立ち会いました、良くおっしゃるんです。アイスクャンデーとか、アンパンとか。子供の頃に食べたかったものなんでしょう。

いつの間にか現われていたバラ子とユリ子、時子の側に、不思議そうな様子で立っている。

ユリ子

時子さん、急にお倒れになってどうなさったのかしら。

バラ子

ごらんあそばせ。眠ってらっしゃるのよ。

ユリ子

あらまあ、ほんとう。よほどお疲れだったのね。

バラ子

可愛らしい寝顔ですこと。

ユリ子

でも日の暮れないうちに湖まで行ってしまわないと。

バラ子

大丈夫ですわユリ子さん、湖の近くにあたくしの別荘がありますでしょう？

ユリ子

ええ。

バラ子

じいやに頼んで鍵を開けておいて貰いましたの。

ユリ子

まあ……

バラ子
ユリ子
バラ子
ユリ子
バラ子
ユリ子

せつかくですもの、私達だけで夜通しお話ししましょう。
なんて素敵なんでしょう。

これは三人だけのヒミツにしましょうね。

勿論ですわ。

時子さんに子守歌を歌ってさしあげましょうか。

まあ、よろしいことね。

二人、讚美歌のような西洋の子守歌をデュエットし出す。

アツ子

先生、母は、ほんとうに苦勞のしどおしだったんですよ。

立花

はあ……

アツ子

子供の頃両親に捨てられたのも同然で、親戚の農家の養女になったんですけど、その家も兄弟が多くて、結局兄弟の子守りに追われて、学校へもろくに行けなかったんです。

立花

はあ……

アツ子

十六で近所の、やっぱり農家に嫁に行ったんですけど、あたしがお腹にいる時に、父ちゃんが肺結核で死んじゃって、兄さん二人とあたしの三人の子供を女手ひとつで、働きながら育ててきたんですう。

立花

はあ……

看護婦、ゆで卵とバナナを持って登場する。

アツ子

あ？ どうも、すみません、母ちゃん、来たぞ、今、ムイデやつからな。

ムキながら、

だいに育てて、後継ぐはずだった長男のあんちゃんも、大学までやった次男のあんちゃんも、二人とも戦争で死んではあ……あたしがムコもらって、百姓ついでけど、ムコがさっぱり働かなくてね。働かないまま東京からきた飲み屋の女と逃げでっただ。

あたしの息子も小さかったから、母ちゃんとあたしで、ずうつと働きっぱなしで。

立花

はあ……

アツ子

母ちゃん、ホラ、むいだぞ。

と、ゆで卵を口に持っていてやる。

時子、口を力なく開けるが、うまくゆかない。

バナナが？ホラ。

と今度はバナナをちぎって入れてやる。

母ちゃん、うまいが？うまいが？息子が嫁を貰ってから、急にボケ出して、嫁の手前、あんまり面倒も見れなくて、ごめんな、母ちゃん、ごめんな。

きつい嫁だよ。母ちゃんが可哀そうで、三年前から老人ホームに入れてしまつて、あんまりだつて息子と相談して、昨年家に連れて帰つたんだ。ほしたら、具合が悪くなつて。

立花

それでこの病院に入院したんですね。

アツ子

はい。あ、食べた、食べた、うまいが？ うまいが？

時子、口のまわりからボロボロ落しながらも、わずかに食べているようだ。
ノックの音。

君恵

どうぞ。

アツ子の息子の茂男と、嫁のみどり入ってくる。

アツ子

遅がつたな。

茂男

えっ？ もうおばあちゃん……

アツ子

いや、まだだ。

茂男

良かった、間に合った。おばあちゃん！

みどり いいんですか？お義母さん、こんなもの食べさせて……

アツ子 ……

みどり あたし、おばあちゃんの好きだった、羊かんと、レモンジュース買ってきたんですけど。

アツ子 あんたのことだから、喪服なんかも持ってきたんじゃないの？

茂男 母ちゃん、あんまりだよ。

アツ子 おばあちゃんがあぶない時に、東京の実家に行ってきますなんて二人で出かけていて、誰だって喪服でもとりに行ったのかと思うよ。

みどり 三十過ぎて喪服も買って貰えない嫁ですもの、仕方ありませんわ。

アツ子 仕事の手伝いもろくにしない嫁にやる金なんかありませんよ。

茂男 母ちゃん！

みどり 農作業はしなくてもいいっていうから嫁に来たのに、今さら何言うんですか！

茂男 みどりさん、よして下さい、こんなところで。

みどり いつまでも敬語使わないでよ！他人じゃあるまいし。

だつてみどりさん、東京の人だし、年上だし。

立花 奥さんも東京ですか。

みどり あら、先生も？あたしは亀戸。先生は？

立花 下落合です。

みどり 遠いわねえ。

立花 はあ……

アツ子

新聞の全国版にね広告出したんですよ、花嫁募集の。

君恵

ああ、五年前。山根村の村おこしのキャンペーンでしょ？「過疎の村に愛を育もう！」って。あのコピー、中学の先輩のが当選しちゃって。

茂男

あそうなの。僕の「嫁にこないか、時代を越えて」っていうの、次点だったんだよ。くやしかったなあ。町の中学生なんか負けちゃって。

君恵

あれ、テレビ局が目えつけて、テレビ見合いやったんですよね。はい。

みどり

過疎だ過疎だって聞いてたけど、あんなに辺ぴなとこだなんて思わなかったわよ。じゃああの時にお嫁にこられた方なんですわね。

茂男

はいつ。あたし、こっちの方にアパート借りちやおうかしら。ここらはほんとにぎやかよねえ。

みどり

みどりさん。

アツ子

あんな見合いなんかで良い嫁が来るはずなかったんだよ。母ちゃんだって、みどりさんが一番しっかりしてて感じがいいって言ってたじゃないか。

君恵

何組ぐらいまとまったんですか？

茂男

七組かな。でもそのうちうまく続いているのはうち入れて四組だけだ。東京から来てくれたのはうちだけなんだ。九州と、岩手と、長野、もう一人はフランス人だもんな。

アツ子

ちよつと年上ですけど、なんて、ちよつとなんて嘘ついて、厚化粧にだまされましたよ。

みどり あんなにありがたがつたくせに。
アツ子 東京じゃ誰も貰い手がなかつたもんだから、わらをもすがる気で応募したんでしょ？
みどり それはそつちでしょ？あたしなんかほんとにわらつかまされちゃったわよ。
みどりさん、そりやないよ。ハハハ。
茂男、おばあちゃんがこんな時に笑うんじゃないよ。
アツ子 そうだよ。おばあちゃん。二人ともこんな時にケンカしないでよ。
茂男

歌い終えた二人うなずき合う。

バラ子 時子さん、もうそろそろ起きて下さいな。
ユリ子 早く参りましょう。ねえ、バラ子さん、別荘に花びんはあつて？
バラ子 ええ。
ユリ子 チューリップ沢山つんで参りましょうね。
バラ子 ええ。
みどり だから、家に連れもどすの反対したのよ。
アツ子 何？ 何？

と時子の唇に顔を寄せる。

みどり 先生、煙草あります。この人吸わないから。

立花 どうぞ。

みどり どうも。

茂男 みどりさん、ここ禁煙だよ。

と言いながら、火をつけてやる。

みどり 灰皿ないみたいだから、これ飲んじやうね。

と持ってきたジュースを一気に飲み干す。

茂男 その缶を持ってやる。その缶に灰を落とすみどり。

立花 失礼ですがあなたおいくつです？

茂男 来年三十です。

君恵 ええ？

茂男 ふけてますでしょう、なんか気苦労が多くて。先生は？

立花 僕は二十六です。

茂男 独身ですか。

立花 はあ……

茂男 先生なんかおもてになるんでしょう？美男子だし、お医者様だし、いいなあ。でも、どうしてこちらの病院に？

立花

大学がこちらでして。僕、東京だから、古里って感覚にあこがれてましてね。子供の頃から大学はこっちの方にしようって決めてたんです。

茂男

へえ、じゃあこんど、家にも遊びに来てください。ほんと、古里！って感じいっぱいしますよ。

立花

農作業なんか手伝わせていただけます？

茂男

勿論ですよ。

立花

一度やってみたかったですよ。嬉しいなあ。

茂男

気が合いますねえ。

立花

は？

茂男

今度一杯やりましょう。

立花

はあ。

みどり

あんた飲めないでしょ。

茂男

飲めなくても、雰囲気が好きなんです。飲んで酔っぱらってる人見るの好きなんです。

みんな子供みたいに無邪気になって、泣いたり、笑ったり、からんだり、ケンカしてなぐり合ったりしますでしょう？お芝居みてるみたいで、楽しいですよねえ。同じ事何度も言ったり、ろれつがまわらなくなったり、ふつうの時とまるで人柄が変わっちゃう人なんかもあるでしょう？どうしてですかねえ。不思議だなあ。ハハハ、酔っぱらった人介抱したりするのも好きだなあ。口に指入れて吐かせたりなんかして、ずいぶん出ますよ。食べたもん全部出るんですもの。

と楽しそう。みどりをさして、

立花

この人なんか、可愛いですよ。こうみえて、酔っぱらうと可愛いんだなあ。
(しみじみと) あなたほんとにいい方ですね。

茂男

そんな、普通ですう。

ゆで卵を時子に食べさせていたアツ子、布団の中で時子がしっかり抱いているものに気付く。

アツ子

何かしらこれ。

君恵が見る。

君恵

ああ、おばあちゃん、いつもたいせつそうに抱えていましたよ。

アツ子

「花物語」あら懐かしい吉屋信子だ。大正九年の初版本。知らなかった、母ちゃんがこれ読んでたなんて。

とページを開く。

ユリ子

時子さん、時子さん。

バラ子
二人

出かれますわよ。
出かれますわよ、時子さん。

アツ子の目に、目の前のバラ子とユリ子の姿が見えてくる。

アツ子 あなた達は誰？

ユリ子 あっ！びっくりした！

バラ子 あなたいつの間に？

アツ子 え？

ユリ子 そういえばさつきお見かけしたような。

バラ子 矢のように早くよぎってらした方。

ユリ子 あなた、どなた？

アツ子 あなた方は……

バラ子 バラ子。

ユリ子 ユリ子。時子さんのお友達ですよ。

アツ子 まさか。

ユリ子 まさかってあなた、私達時子さんのクラスメイトで、今朝から、時子さんは花の会の

アツ子 一員ですよ。

バラ子 花の会？

アツ子 あたくし、学校では紅バラの君と呼ばれていますの。

ユリ子

あたくしは白ユリの君。紫の君のスマイレ子さんが転校なされて、代りに何の君でもな
かったけれど、時子さんが入会なさったの。

バラ子

そうですね。時子さんにもアダナをつけなくては。

ユリ子

卵の君じやイヤミだし……。

バラ子

フッフ、時子さんはりんどうの君よ。

ユリ子

そうですね、さつき御自分でおっしゃったんですもの。

アツ子

りんどうの君……

アツ子のひろげた本のページから、りんどうの押し花が舞い落ちる。

それを拾いあげたアツ子の目が、優しく懐かし気にうるんでくる。

二人

時子さん、時子さん。

二人、時子の手をとる。

起きあがった時子は、まさしく十五歳の少女である。

時子

あたし眠っていたわ。

二人

ええ、さあ時子さん、出かけましょう。

時子、ベッドから飛び降りて、涼やかな笑顔を向ける。

アツ子 ……
時子 どなた？
ユリ子 知らないオバサンよ。
アツ子 か、母ちゃん？
時子 アラ、アタクシの御本。返して下さる？

アツ子、時子に本を手渡す。

アツ子 どこ行くの？
時子 林の先の湖よ。バラ子さんの別荘の近くのととても深い湖。
アツ子 別荘ってどこの。
バラ子 いやですわ。別荘って軽井沢にあるものよ。
アツ子 だってここは山形県でしょうに。
バラ子 変な方。
ユリ子 ねえねえバラ子さん、山形県でどこにあるんですしたかしら。
バラ子 北海道と青森の間じゃなかったかしら。
アツ子 海でしょ！そこは！
バラ子 あたくし東北地方って全然知りませんわ。
ユリ子 まあ、山形県で東北地方ですか？石川県や新潟県より北ですか？

アツ子 そんな北の方に人が住んだりできるのかしら。
ちよつと、山形県人をエスキモーみたいに言わないでよ。

時子 こんな人ほつといて参りましょう。

二人 ええ。

アツ子 母ちゃん、軽井沢の湖なんか何しに出かけて行くんです？

時子 オバサン。どんな事情がおありか知りませんが、未婚の女に母ちゃんなんて呼ばないで下さいまし。

アツ子 どうして行くの？りんどうの君。

時子 常には草燃ゆる未開の原に、百年に一度現わるる湖ありき。千年の昔には満々と水たたえる緑の湖。あやかしの術にて、幻と消ゆ。そのち百年に一度のみ、術より解き放たれ、美しき姫君とともに立ち現わるなり。

アツ子 は？

時子 千年の昔に、月から降りてきた美しいお姫様が、森の風の王子様との結婚を断つたために、湖の底に閉じ込められ、百年の眠りを眠っているの。誰からもさとられぬように、湖は隠され、五十坪ほどの草原に変わっているのだけれど、百年に一度の満月の夜、その満月が草原の中央に光を落とした時、草原はもとの湖となり、その水面に映った月の奥底から、かの美しい姫君が、侍女とともに現われ、月よりの使者を待つという。私達は、その姫君をお救いに参るのですわ。

二人 まあ、そうでしたの？

ユリ子 ただのピクニックではなかったのですね。

バラ子 あたくしワクワクして参りました。
ユリ子 でもどうやって救い出すんですの？

時子 愛するのですわ。

二人 ええ？

時子 ほんとうに姫君を愛する者が現われた時、姫君ののろいは消え、月に帰ることができ
ますの。

二人 まあ！

アツ子 首スジがかゆくなるほど乙女チックなお話。ほんとに母ちゃんかしら、この人。

ユリ子 でも姫君を愛する人はどこにいるの？

時子 ここですわ。

バラ子 え？

時子 あたくし、ほんとうに愛しておりますの。もうそのとりこになっているのですわ。

ユリ子 でもお会いしたことないんでしよう？

時子 毎夜、毎夜、夢枕に現われて、「助けて、助けて」とおっしゃるのですもの、初めはあ
たくしもただの夢物語だと思っておりました。けれど昨日、枕元に、このベールが。

と突然薄布を懐より出す。

二人 急に出てくるのですね。こんなものが。

時子 この姫君のかぶるベールを湖に広げると、水の上を歩けるんですの。

これ今は小さいけど、湖に落とすと、大きく大きく広がるのですって。
これで助けに来て下さいと、姫君がおっしゃるの。ですから私、矢も楯もなくな
って。

アツ子
バラ子

母ちゃん、レズだったの？
ほんとにオバサン判らない人ね。愛っていうとすぐにセックスを連想なさるんだから。

時子「花物語」を開く、まばゆい光がほとばしる。

アツ子

まぶしい！なんてまぶしい吉屋信子の世界。昔、置き忘れた乙女のロマング、嵐のよ
うにおそってくる。

二人

さあ参りましょう！

アツ子

あたしも連れてって！

二人

オバサンは連れてけないわ。

と一陣の風。

時子
バラ子
ユリ子

あっ！

アツ子を強い風がおそう。するとかぶっていた手ぬぐい、着ていたノラ着が風に飛ばされ、半ズボンをはいた少年の姿に変身する。

アツ子
あああ！

時子

バラ子

ユリ子

おお！

アツ子

これは……どうして、私だけ少女に変身できなかったのかしら。そうだ。昔「花物語」を読みながら、本のページのお姉様方を、学校であこがれていた男子の面影に重ね合わせていた私だった。どうしたって女より男の方が好きだった助兵衛心を見透かされ、深層心理が惑星ソラリス。

三人

あなたは一体誰ですか？

アツ子

ソラリスと呼んで下さい。

時子

空飛ぶリスですか？

アツ子

それじゃまたたびだ。

時子

カッパからげて？

アツ子

またたび違い。

時子

とにかく行きましょう。

ソラリス

よしっ！

三人

うんっ！

美しい少年少女合唱団の歌声とともに、四人はハタと消える。

立花

アレ？

君恵

どうしました？

立花

脈が……

君恵

ああ！

ベッドの上にはりんどうの押し花がはさまれ開いた、一冊の「花物語」のみ。

茂男

母ちゃんがいない。

立花

それどころかおばあちゃんまで。

開かれた「花物語」に窓から射し込む月の光がこうこうと。

みどり

何よこれ。

と本を手にとる。

あああ。

とケイレンする。

茂男

みどりさん、どうしました、みどりさん。

とみどりの手をとるとケイレンがうつる。

あああ。

立花

何です！しっかりしてください。

と肩に手を置くとこれまたケイレン。

君恵

先生！ 先生！

と腰に手をまたまたケイレン！

四人連なつたままおこりのようにケイレンする。

暗
転

林の中の軽井沢の別荘。
広間の中央の庭に通じる大きな窓の外に、林に囲まれた大草原が見える。
窓に垂れたレースのカーテンが風にふわりと揺れている。

ユリ子 何時かしら。

バラ子 お月様はまだ？

ソラリス

影も形も見えないよ。ホラ、クジラの形の黒雲だ。アレがきつと隠してるんだ。ずい分時間がたつのに、辺りは薄ボンヤリと明るくて、まるで白夜のよう。こんな夜は嫌だな、なんだか不吉な胸騒ぎがする。

ベランダに立っていた時子が振り向く。

時子 サラサラ、サラサラ。

ユリ子
バラ子 } え？

時子 サラサラ、サラサラ、さざ波の音……
ソラリス 草が風に揺れる音さ。

時子

感情のないものが動くのを見てると、恐くて息がつまりそうになってくる。
サラサラサラサラ。

ソラリス

草の生命を知る人の、死んだ誰かのため息みたい。

バラ子

バラ子さん、この別荘には時計がないんだね。

ええ、お忙しいお父様が、ここに来た時ぐらいいは時間を忘れていたからって、ホラそこにあつた大きな柱時計まではずしてしまわれたの。

太い柱に四角の跡が残っている。

ソラリス

へえ……

時子

だんだん風が強くなってきたわ。打ち寄せる大波のように草がうねって……悲しい音。
死んだ赤ん坊が泣いているような、たまらない音。

バラ子、吐き気におそわれる。

ユリ子

どうなさつたの？

バラ子

ちよつと気分が……

ソラリス

食あたり？

バラ子

違うわよ。

ソラリス

食べ過ぎ？ウンチしてきたら直るよ。

ユリ子 失礼ね。
バラ子 体が弱いによあたし。
ユリ子 あたしも。

と吐き気。

バラ子 肋膜をわずらっていて、長くないのよあたし。
ユリ子 あたしも、心臓が少し……
ソラリス ええ？ 見えないけどなあ。
バラ子 美しい花の令嬢というのは体が弱いと決まってるのよ。そしておしまれて夭折するつて決まってるの！

ソラリス ああ……肋膜が……
バラ子 ロクマクつてどこのマクよ。
ソラリス ロクマクはロクマクよ。
バラ子 体のどこよ。

ユリ子 ……
バラ子 ……
ユリ子 ……
ユリ子さん。
ロクつていうぐらいだから、肋骨の辺りなんじゃないの？でも肋骨つていつぱいあるわよね。右左で二十四本あるんだものね、そのどこだろう。あたしは心臓だもの。

ハラ子 ハッキリしてるわよ、良かった、心臓で……ああ……心臓が……（と心臓を押える）
肋膜が……（と色々押える）

ソラリス ゲー。（と吐き気）

二人 何よ！

ソラリス もらいゲロしちゃった。子供は感受性が強いんだ。

ハラ子 嫌よ今夜オネショしちゃ。うちはみんな、羽根布団なんですから。ウツ。

と又吐き気。

ユリ子 バラ子さん、あたくしより先に死んでしまつてはいやよ。

ハラ子 何をおっしゃるの？こんなところで死んでたまりますか、何週間か、学校を休んで、

皆様にノートをとっていたいたり、お手紙を書いていたりしてからでなくては死ぬ意味がありませんわよ。この紅色の頬が、日に日にやせて、青白くかげつていくのを見て、皆さんが心を痛め、さらに恋い慕い、涙を落とすというのでなければ、私達の存在理由がありませんでしょう？でもユリ子さんは、知的でりりしくて活発な点がポイントですもの、何も心臓病なんかにおなりになる必要はありませんわ。

ユリ子 あら、明るく健康的なスポーツ少女が、突然死の病に侵されるからこそ、悲しみをそそるんじゃないませんか？私達は最終的に不幸にならないければ、悲劇を背負って生きていかなければ決してヒロインにはなれませんのよ。

ハラ子 お金持ちで、美人で、才能もあつて、性格も良い私達の不幸といえば、もう病氣しか

ユリ子　　ないのですもの。病気に頼るしか、悲劇への道はないのですわ。そうですわよ。ウツ。

と吐き気。

時子

草の匂いだわ。風に運ばれてこちらに流れてくる草の匂いがきつすぎて気分が悪くなるんだわ。

ソラリス

ほんとだ。懐かしくてほろ苦く、せつない匂い。なんだかボンヤリしてきた。草の匂いが眠りを誘うんだ。

バラ子

ユリ子

ほんとう。

バラ子

体がぐったりして……

ユリ子

風邪薬を飲んだ時みたい……

時子

ダメよ、眠っちゃ。きつと月が出る予兆なんだわ。白夜のようなオボロな空気も、草の波も、私達を眠らせる月の妖術に違いはない。

目覚めたお姫様を他の誰かがけっして見ることのないように、眠りの匂いをかがせようとしているのよ。

ソラリス

君は眠くないの？

時子

あたしは恋する少女ですもの。恋は眠りをなくすでしょ？なくした眠りを手に入れるのには、恋の成就しかありえないもの。まだ見ぬ恋人に出会うまでは、けっして眠れぬあたしなのよ。

ソラリス

なるほど。じゃあ、恋を知らない少年の僕はどうしたらいい？

時子

オバサンにもどって家計簿開いたら？

ソラリス

もうイヤだよ赤字の国で夜泣きするのは。

ユリ子

バラ子さんしつかりなさって、物語の少女が夢物語にくじけてしまつては、大正、昭和の読者の皆様に申し訳がたなくてよ。

時子

これは夢物語じゃないわ。こうしてここで生きて喋ってるあたしの、どこが夢物語なのでしよう。

ユリ子

興奮なさらなくて、草原が湖になって、百年の眠りから覚めたお姫様が現われるなんて夢物語だって言ってるの。そんな夢物語に付き合わされて、ネムたくなってる私達って、なんなのかしらって言ってるの！

バラ子

ユリ子さん、あなたお元気ねえ。

ユリ子

死の病いと闘う少女ですもの。「死は眠りにすぎぬ」と言うでしょう？死と闘うためには、眠りとも闘わなくては！

ソラリス

なるほど。

バラ子

ネムーイ。コーヒー、誰かコーヒーちょうだい。

と、セムシで片目の男が突如現われる。

ユリ子
ソラリス } キャツ！

男 どうぞ。

とコーヒーを乗せた盆をさし出す。

バラ子 遠山、いたの？

遠山 さつきから地下室に。

この男、良く見ると前景の茂男と良く似ている。

バラ子 皆さん、じいやの遠山です。五年ほど前から別荘の番をして貰ってるの。

ソラリス、遠山の背中のコブをたたくとコチンと音がする。

ソラリス タライでも入れてるの？

一同、なんとということをして！という目と仕草でソラリスを制する。

遠山

イエネ、坊っちゃん、これは頭なんです。取りはずしのできない、コブ状にかたまつた人の頭なんですよ。私の頭はここにこうして乗っかって、これも簡単には取りはずしがきかないが、背中の頭は、兄貴のことでして、双子で生まれてくるはずだった一卵性の兄貴の頭だけ、死んで背中にはえてるんでさあ。

ソラリス

まさかあ……

遠山

なら、お見せしましょうか？

ソラリス

い、いいですよ。

遠山

私が死んだら兄貴の奴、生き返るかも。ああバラ子様。

とバラ子の飲んでいるカップを指さし、

バラ子

その中に遠山家伝来の覚醒剤を入れました。
ええ？

遠山

もう皆さん絶対に眠れませんよ。保証します。一生眠らんで暮らせます。私なんか、

三つの時に飲んでこの歳まで、一度も眠つたためしがない。良くきく薬でして。

ソラリス

そらないよオジサン。

遠山

代々下男の私ら一族では、三歳の誕生日にこれを飲んで、身も心も、主にささげ、身を粉にして働き続けるならわしで。眠らずに済むということは、人の三倍生きることですぜ。だから老けるのも早くて、私、三十歳には見えませんよねえ。

バラ子

じいや、そんな年なの？だって私の小さい時からそんなだったくせに。

遠山

あれは親父です。人様に知られぬように入れ替わる、これも遠山家のしきたりです。

遠山一族はみな同じ顔形をしているのです。このスタイル、いかにも伝統的な下男。

古今東西の下男のパターンでありましょう？遺伝に遺伝を重ね選り抜かれた下男の最
高峰が私です。

ソラリス

そんなこと言っていると、差別問題調査会から投書が来るぞ！

遠山

大丈夫。去年、「オペラ座の怪人」友の会に入会したからバックに劇団四季がついてる。

せんに、「ノートルダムのせむし男」友の会に入会した時も大丈夫だった。差別を語らぬ演劇が演劇といえるでしょうか。

ああ、テレビのない時代に生まれてよかった。

ソラリス

訳の判らないこと言っていないで、どうしてくれるんだよ、飲んじやったじゃないか。

遠山

大丈夫、解毒剤がありますから。

と袋を取り出す。

ソラリス

なんだよ、ただの砂じゃないか。

遠山

これは眠りの砂。この砂が目に入るとどんなひどい不眠症の患者でも、コテンとグツ

スリ行けるんです。

ソラリス

話が全部インチキ臭いが、確かに頭はハッキリしてきた。

時子

月が出た。

一同

おお！

窓の奥の草原に月光が射し、見る見るうちに湖に変化して行く。
中央より波紋が起きさざ波が生まれ、人影が二体、底の方から浮かんで見えた。

時子

じゃあ、あたくし、出かけて参ります。

と懐のベールを取り出したその時、柱時計の跡から腕が伸び時子の手をグイと引き寄せる。

不思議な、時を知らせる時計の音が辺りにとどろく。

一同

ああ！

ソラリス

こ、これは！

時計の跡が開いて、中から、無国籍の王子のような扮装の男が現われる。医者
の花に似ている。

時子

何ですか、あなたは。

王子

判ってるでしょ？風の噂で聞いたでしょ？

時子

ということとは。

一同 森の風の王子ですか？

王子 その通り。

ソラリス 大の大人が、恥ずかしくありませんか？

王子 だから、自分で言わずに人に言わせたんだ。こいつらだって充分恥ずかしいぞ、おあいこだ。

(とバラ子とユリ子をさして)

恥を恐れて人前に立てるか。

あなたは風なのでしょう？どうして風が、人の形をして現われるんです？

……

ソラリス 何テレテンだよ。

王子 だってこの人急にマジになるんだもの。すぐにはついて行けないなあ、女子供が大映テレビ好きなの判るよ。

時子 (構わず) ねえ、どうしてなの？どうしてここに？

と目に星を散らせる。

王子 時間を発見した古代人は、月の形の移り変りを時計代りにしていたことは知っているね。

一同 はいっ！

王子 その移り行く時の記憶を、風が運んでいることを知っているだろうか？



89年初演より
柱時計の跡から姿を現した森の風の王子（諸角憲一）
=右=

一同

いいえ。

王子

空気が流れ風になる。人が生きて呼吸するだけで、幾億の風が生まれ、群をなす。君も君も君も、体の中に嵐を呼ぶ風を孕んでいるんだよ。そしてその風は一度生まれたら、ひきもどすことのできない、時間となって、過去に流れて行く。一瞬一瞬がただ記憶となつて、観念の国へと消え去って行くのだから。風は、そんな記憶を飲み込みながら、四六時中吹いている。

人が忘れ、置き去りにした様々な記憶を抱え込んで、永遠に吹き続けるのが風なのさ。時々耳を澄ましてみるがいい。

子供の頃の運動会のざわめきや、忘れかけた子守歌が聞こえてくることがあるはずさ。風は万人の思い出を運ぶ、時の王子なのさ。

ソラリス

それでこの柱時計の跡から？

王子

何百年も時を刻んだ柱時計の記憶の残像は、それを思う何百人もの死者の意識にささえられ、ここに無い、今でも、ここで時を刻んでいるんだ。そして私が現われたのは、この少女が呼んだからさ。

時子

私は呼んだりなんかしなくてよ。

王子

長い間忘れられていたあの姫君を、君は思い出してしまったじゃないか？君の心に眠っていたあの姫君を目覚めさせたんだ。僕のこととも思い出したはずだぜ。

ソラリス

母ちゃん！

舞台明るくなると、遠山の背中のコブは消え、めがねをかけた実直そうな中年に変

わっている。

遠山 時子、良く来たな……母ちゃん元気か？

時子 判んね。

遠山 なして？

時子 会ってないもの、父ちゃん東京さ行ってから、母ちゃんも出てって、もう半年も会ってねえもの。

遠山 お前、こつちさこねが……父ちゃん、ここの別荘番始めで、一年になるげんと、お金

も少しはたまつたし、仕事も楽だし、部屋も十畳ほどもある洋間あてがわれで、お前ど二人充分暮らせるんだ。一緒に暮らすべ。な、時子。

時子 きれいな家だね。

遠山 なんだべ。ホレ、外国の菓子だ、食べてみる。こんな御時世でも、あるとこにやあるんだ。

バラ子 あら、娘さん？

遠山 あ、時子、アイサツしろ。

お嬢様方だ。春休みで、今、遊びに来てらっしゃるんだ。

時子 ……

どうなさったの？

遠山 スミマセン、田舎育ちでアイサツも知らなくて。

時子 きれいだなあ、お人形よりきれいな人達だなあ……

バラ子 あなた小学生？

時子 ……学校行つてれば……

ユリ子 まあ、ダメよ、学校には行かなくちや。お勉強なさいな。

バラ子 そうだ、これ、あなたにさしあげるわ、お会いした記念に。

と本をさし出す。

時子

ハナモノガタリ
「花物語」

ユリ子 まだあなたには早すぎるかも知れないけど、おもしろくつてよ。

バラ子 まあ、お月様がきれい。湖の方まで行ってみましょうよ。

ユリ子 ええ。

遠山 お気をつけなさって下さいよ。

バラ子 大丈夫よ。

と二人、笑いながら外に消える。

遠山 な、時子、こっちさ出でこねが。

時子 オレいねぐなつど、オバチャンだが困る。赤ん坊の面倒みる人いねぐなるもの。

遠山 オバチャンだちさ金送つから。

時子

オバチャン達から盗んだ金だてまだ返してないくせに何言うの？オレが働いで恩返しすっからいい。オレ、明日の朝帰る。ごごさ来れだのも、オバチャン達が、オレのごと可哀そうに思て、父ちゃんさ会ってこいて、お金持だせてくれたからだ。

父ちゃんも母ちゃんも自分のことばかり考えて、人の気持ちちなの判らねんだ。

時子……

遠山
時子

夢だと思えばいいんだ。ごごさ来たことも、あのきれいな人達も……こんな暮らしは、夢なんだ……

……寂しいなあ……寂しくて寂しくてオレ死にたいなあ……んでも、こんなオレでも死ねば悲しむ人もいるかも知んね。そう思わねどあんまり情けねなものな。生まれてきたことを呪うようになるも、誰でもみんな、何かの役にたつように生まれできたはずだ。何がするのために生まれできたはずだ。父ちゃん、オレ、帰る。

ほして、眠ってるんだと思つて生きてくぞ。夢だと思えばつらくねえ。オレ、いつか誰か、起こしてくれる人が現われるまで、ずっと眠てるぞ。

ソラリス

母ちゃん、母ちゃん！

時子

〽幸せが空にあるなら

天使の翼を絵に書いて

マツチの炎で燃やしましょう

煙の翼の方角に

別なあたしが見えるでしょう



89年初演より

上京するよう説得する遠山（花王おさむ）=左=と時子

懐よりボールを取り出し湖に広げると、ボールは大きく広がって、ガンジョーになり、時子、その上に乗って消える。

ソラリス 母ちゃん！

舞台、明るくなる。

王子 待てよ。

ソラリス なんだよ、どこ行ってたんだよ。母ちゃん、いや、りんどうの君行っちゃったじゃないかよ。

王子 大丈夫。まだ脈はあります。

ソラリス え？

王子 いや、記憶の回想を同空間でやられると、僕は風ととろけ、粒子となって漂う体質の風でね、まんまとはめられた。すぐに追いかけないと、姫を横取りされてしまう。

ソラリス バラ子さんとユリ子さんは？

王子 同じことさ、本のページでしばし休んでいるのでしよう。じゃ私は急ぐよ！

と何か二の線のポーズを決めて走りかけたその時、空中から人が落ちてくる。

人 そうはさせないよ。

と落ちてきた人スックと立ちあがり、王子の前に立ちはだかる。

ソラリス あなたは一体！

人 月よりの使者。

とその銀白色のマスクの中の顔は看護婦の君恵だ。

使者 ここで会ったが百年目。本当に百年振りねえ。

と剣を出して王子に襲いかかる。

王子 くそう。

と王子も剣を抜き応戦する。

ソラリス 僕は一体どちらに加勢したらいいんだろう。あの、悪玉はどっちです？悪玉は。

使者 アッチだアッチ。決まってるだろう？姫君を呪いで閉じ込めたのは風の王子なんだ。ここでこいつを倒さなければ、姫君はまた湖の底。

と戦いながら、

ソラリス

でも、お姫様を本当に愛する人が現われたら呪いは消えるって話でしょ？王子様はお姫様を愛してる訳でしょう？なんか変だな。

王子

それはあの人を望んだからでしょう。時があの人を愛するのをこぼんだからでしょう。私は時の化身、記憶の影だもの。

ソラリス

じゃあ、悪玉とは言えないなあ、遠山さん、どう思う？

遠山

判るまで待てと、死んだ兄貴が言ってます。正義は勝つものだから、これが戦前だったら、特に絶対勝つものだから、勝った方が善玉だから、このまま戦わせとけて。

ソラリス

なるほど。ここに回想シーンから引きついだお菓子があるから、食べながら、見てみましょうか。

遠山

ええ。

王子

バカ、こいつ間違いだぞ、月に住んでる奴は、みんな間違いなんだ、早く殺してしまわないと、何しかすか判らんぞ。

使者

何よ、何よ、何よ。

二人激しく戦い、痴話喧嘩の態となってくる。

ソラリスと遠山、のんびりやっている。

遠山

いやね。兄貴はこう、靈感があつてですね、助かりますよ。病気を気で治すこともで

きるんですよ。僕なんか、医者にかかったことないですもの。去年階段から落ちて左足複雑骨折した時なんか、気で三日で治っちゃって……

ソラリス その兄さん、手はどこにあるんです？

遠山 手？

ソラリス (気の仕草をして) この、手ですよ、手。

遠山 てえ？

と背中辺りを探す。

使者 タイム。

王子 なんだよ。

使者 互角だわ。勝負にならない。

と女子科学隊員のように決める。

お茶でも飲んで、休みましょう。

王子 ええ？グズグズしてられないんだがなあ。

と言いながらも休んでしまおう。
遠山二人にお茶を入れる。

使者 フフフフフフハハハハ。

王子 なに？

使者 姫がやってくるわ。

王子 え？

使者 あの子が姫を救い出すまで、時間をかせいでいただけのこと。もう大丈夫、ホラ、来た。

湖より、長いベールをかぶった、伝統的姫君コスチュームの女が、バラ子とユリ子に手をひかれて現われる。

王子 くそう、乗っかっちゃって、だまされた。

ソラリス あなたがお姫様ですか？

姫 (宝塚の娘役の声色で)

ええ、やっと呪いが解けました。

しかしその声は時子だ。

ソラリス 時子さんとは？

姫 湖の底。

ソラリス ええ！

姫 私が眠りから覚めるためには、別な眠りが必要です。ですから私を真底、愛する人が必要でしたの。私の代りに湖に沈む方が。

ソラリス そんな！あんただましたね！

王子 そう……だったかなあ……

ソラリス あんたも！

使者 私は姫を月に帰するのが役目、それだけの使者ですもの。

バラ子
ユリ子 } 時子さんはそれを望んだのですもの。それで幸せなんですわ。

ソラリス こんな展開になるなんて、みんな悪玉だったんだ。時子さあん！りんどうの君！

と湖に行こうとすると、湖から人がザバツと、ズブぬれで現われる。

一同 ワツ！

現われたのはみどりである。

なぜか、口にくわえた煙草だけは火がついており、手には灰皿代りの缶ジュースを
持っている。

みどり

何だよ、何であたしだけがこんななの？

一同

さあ？

みどり

おぼれるとこだったじゃない。気が付いたら泳いでるんですもの、まいつちやつたわよ。ちよつと、なんであたしだけ変身できないのよ。みんな、なんか、ちよつと、こういう時でもないときできない格好してるじゃないの、なんであたしだけ普通なのよ。あたしだってお姫様の役やりたいじゃないよ。

姫

これは役じゃないわ。本当のお姫様なのよ。

王子

本物の王子に。

使者

本物の使者。

遠山

そして本物の下男なんですよ、みどりさん。

みどり

ウソよ。あんた、あんたじゃない。あんた下男みたいな生活してたくせに、こつち来てまで下男やつてるの？

遠山

私は好きなんだよこれが。人につくすのが好きなんだ。じゃなきゃなんであんたと一緒になるの。ねえ。

みどり

とにかくあたしは嫌ですからね、こんな。何かないの？何か……

使者

そういえば姫の侍女が見あたりません。姫、侍女のドラマはどこです？

一同、みどりを見る。

みどり

嫌よあたし、侍女なんて、あんたそれ脱いでよ。交換しよ、ネ。

王子

これは一見衣服のように見えるが、実は体の一部なのです。ホラ、このヒダの一つにも細かい血管が通ってる。脱いだりできないことになっています。

みどり

やだ、気持ち悪い。みんな化物じゃない。やだやだ、帰ろうつと。……あれ？やだ、ねえ、ここどこよ、どうすれば帰れるの？あら、これ時代もんね。高いんじゃないの？貰ってこうかしら。ねえ、お義母さん、去年ひききでもで貰った洋皿セット、この人近所の猫に猫まんまつくって食べさせちゃったのよ。洗って一緒にしちやったもんだから、どれがそうだったか判らなくなっちゃってさ、気持ち悪いから使ってないでしょう？

あれ捨てちゃってさ、あ、捨てんのもつたないから、リサイクルショップに売っちゃって、千三百円ぐらいにやなるわよあれだって。そいで代りにこれ貰ってこうよ。アラ、このカップいいじゃない。ま、イギリス製。

一同、あきれて見ている。

あんた、駅どっち？(ニコニコ)。

遠山

軽井沢だよ。

みどり

またまた。

ソラリス 本当によこは軽井沢なんだろうか。もしかすると、この湖は、かの「ソラリスの海」なんじゃないのだろうか！

みどり 何、きばってんの？お義母さん。

ソラリス ……

みどり 早く家帰ろう、じゃがいもにこやしやるんでしょ？あたし手伝わないわよ。あんた、帰って肩もんでよ。もう久し振りで電車乗ったら疲れちゃってさあ、やっぱ東京は人が多いねえ。山形帰ったら、ホッとしてんだから、あたしもとうとう田舎の嫁におさまっちゃったわよ。

さ、帰ろ、帰ろ、駅どっち？

え？（とバラ子に）あなた下着見えてるよ。若造りしちゃって、いくつ？

バラ子とユリ子、どう対処して良いか判らない。

ユリ子 原さん、この方さつきから何おっしゃってるの？

バラ子 杉さん、私も皆目、理解できなくてよ。「花物語」にはけっして登場してこないタイプの方なんですもの。

ユリ子 どうしてこんなに、目先のことだけにとらわれていられるのかしら。

みどり 未来を考えて主婦ができるか！

ユリ子 主婦に未来はありませんの!!

みどり 主婦の未来は主婦だもの。おくせず屈せず目先だけ。主婦たるものの鉄則です。

バラ子 あたくし永遠の処女でいようつと。
ユリ子 御立派ですわ原さん。あたくしも、男の方の足をすくって尼寺に参りますわ。
バラ子 見上げた方ですわ杉さん。

二人アンニーローリーをデュエットし始める。

みどり なんなの？こいつら。

王子 話をもとにもどそう。

ソラリス こんな展開になるなんて、みんな悪玉だったんだ。時子さあん！りんどうの君！

と湖にかけよる。

あつ！湖が……もとの草原にもどってる。どうしたらいいんだ。

姫 誰か時子さんを本当に愛する人が現われるまで、私と同じように、百年の眠りを眠るのですわ。

ソラリス 百年も待つてらんないよつ。王子様、あなたがかけた呪いなら、それをとくのだってできるはずでしょ？

王子 それは無理だよ。後先考えはずみの勢いでかけた呪いだもの。良くあるだろ？やっちゃってから「しまった！」と思ってもどうにもならないことつて。あれだもの。

ソラリス

いいかげんな王子だな。さてよ、昔観たジーン・ケリーとチド・チャリツシュ主演の「ブリカドーン」という映画では、愛し合う二人の意識が奇跡を起こし、眠った村を、再び目覚めさせることができたんだ。お互いの歩み寄る魂が奇跡を起こせるのだとしたら、時子さんの魂はこの中の誰と、通じているのだろうか。

みどり、おもしろそうに客になってみている。

ソラリス

お姫様、時子さんの夢枕に每晚現われ、愛を誓ったあなたです。時子さんの愛によって目覚めることのできたあなたこそ、時子さんをこの世に引きもどす唯一無二のお人ですよ。

姫

ソラリス

どうしてだまっているのです？

女性同士のたぐいまれな愛の犠牲によって目覚めた生命ではありませんか？

眠り姫を目覚めさせるのは昔から王子様ときまっています、逆境の少女が同じ性を持つ姫君を救う話を、僕は今まで聞いたことがあります。吉屋信子はどうして男を描かなかったのか、どうしていつもいつも成熟しきらぬ乙女どうしの恋情ばかりを描き続けてきたのでしょうか。「花物語」の乙女達は、その同性の思い人のために、幾人も幾人も淡く短い生命をおとして行きました。何かその中には大きなナゾが隠されているのかも知れませんが、少年の僕には判りかねます。そのナゾに魅かれて、心ときめかせた幾億もの読者のためにも、小さなりんどうのつぼみを花開かせてはくれませ

んか？

姫 ……私にはできません。

ソラリス ……

姫 そのナゾゆえにできないのです。

「花物語」が乙女達が恋に焦がれる激情を、束の間に封じる魔法の小箱であったとしたら、女達の輝ける性がおよぼす惑いの心理を蹴散らそうと、社会があまり出た処世術であったとしたなら、迷える読者の乙女達の胸も腰も、きびしい時代の巷の隅で、凍えたままでいるかしら。

ソラリス 話をそらさないください。どうしてもできないなんて言うんです！

姫 私と時子とのナゾは、もつとはりつめたナゾなのです。どちらかが目覚めれば、どちらかが眠る、二人同時には起きていることのできない、芝居の二役のようなナゾなのです。

一同 なるほど。

ソラリス そのナゾを解く鍵は……

姫 その鍵は、侍女のダーマが持っています。

一同、みどりを見据える。

菓子を食って客で見ていたみどり、事のしだいに狼狽する。

みどり やだ、あたし持ってないわよそんなの、これは、うちの鍵だもの。これは車の鍵だし、

遠山

これは日記帳のだし。

でも、どうして侍女が鍵を？

姫

ヒロインにはその行く手をはばむ、意地悪なカタキ役が必要なのは知っていますね。

一同

はい。

姫

そのカタキ役の登場によつて、ヒロインのけなげさや、清らかさが浮き彫りになる仕組みになっています。一人の悪玉が悪玉のまま死んだり、罪を悔いて更正したりすると、また次の悪玉が現われ、ヒロインを様々の角度から試して行く訳です。

一同

ええ。

姫

どんないじめにあつても、ヒロインはくじけず、気高く、うらんだり憎んだりすることはありません。いつも慈悲深く、逆に悪玉をかばったり助けたりしながら、ラストシーンへとはいあがつて行くのです。

一同

そうですね！

姫

ヒロインのあるところ悪玉あり、ヒロインの鍵は悪玉がにぎっているのです。

王子

侍女のダーマは、アクダーマのダーマだったのか。

みどり

あの、あの、あの。

ソラリス

時代を越えた悪玉、不偏的悪玉こそが貴様だったんだな。

みどり

ええ？

ソラリス

だから変身しなかったんだ。

使者

ノラ仕事を嫌がる東京から来た嫁。

遠山

立派な悪玉ですな。

みどり

くそう、家族中が他人ばかりという嫁の孤独を描いたドラマであつたなら、こちらこそがヒロインなのに。

王子

みんな武器をとれ！

一同

おう！

一同、なぜか武器を持っている。

みどり

一人に多勢とは卑怯なり！

王子

正義は何をやっても正義なんだ。

何人殺しても正義なんだ。

姫

かかれい！

一同

おう！

戦いの途中、みどり、遠山とソラリスの落とした砂袋を拾い、一同の目に投げつける。

遠山

あつ、それは眠りの砂。

一同、投げつけられた順番に、ぐったりとなつて眠り始める。

みどり

ね、やっぱりあたしの方が正義だったのよ。
こうなってみると、誰も信じちゃいけないってことよね。自分の味方は自分しかないんだわ。

あ、お月様、お月様の上の果てのない夜。永遠という名の恐ろしい鏡があ夜の夜の上にあるんだって、昔、一度だけ好きになった男が言ってたわ。

その鏡は、永遠に等身大で、その生命の分だけ生きてる人間の、その小さな感覚の中にだけ永遠はあるのだって。「死んだら終りさ、死んだら、永遠に終りが来るのさ」

あたしは、そんなことを言うあの人が好きだった。そんなことばかり言って、本に埋もれて暮らしていたあの人が。でも、そんなあの人を好きだったあたしを、あたしはもう忘れてしまった。あの人もあたしも、あたしはもう忘れてしまった。この世で一番悲しいのは忘れられた女だって言ったのは誰だったかしら。

あの時のあたしは、今のあたしに忘れられて、悲しがつているかしら。……やだわ、あたしったら、どうしてこんなことを考えてるのかしら……風だわ、風が吹いてる……うう、寒！

と暖炉に火をつける。

着替えなきや、風邪ひいちゃうわ。人がズブ濡れだっというのに誰も気にかけてくれないなんて、ほんと、みんな悪人だわよ。

と、地下室の入り口を見つけ、降りて行く。

風が舞っている。

倒れていた姫起きあがる。ペールが落ちると、それは時子である。

王子が暖炉の前に立っている。

起きたのかい？

……

姫君が眠ると君が目覚める。本当だったんだね。

あたしは目覚めたくなかったわ。早くもう一人のあたしを目覚めさせたかったの。眠るように生きてみせると決意した昔、いつか、あたしではない本当のあたしが、覚醒して、もう一度別な人生を生きたことがあると信じたの。あたしは、そんな別なあたしに恋焦がれ、その時を待っていた。

あたしが、自分でかけたそんな魔法を信じて、ずっとずっと生きてきたのよ。今夜ようやくその時が来たものだから、あたしは逆に、このあたしを、湖の底に沈めて、忘れようとしていたの。

眠るように生きていけたなら、いつかは覚める夢のように。けれど現実の私は、凍える指先に息を吹きかけながら、たまらない不安と絶望の淵で眠れぬ夜に泣いていた。小さな鏡の前に座って、鏡の奥に別なあたしを見つけた時、唯一あたしはこれが夢なんだと思うことができた。年ごとに老けていくあたしの前で、別な、少女のあたしが、こっちこっちと手招きしてるのが見えるようだった。

王子
時子
時子

主人が結核で死んだ時も、戦争で散った息子達のカラッポのお骨が帰ってきた時も、あたしは、夢なんだ、夢なんだと、鏡の前で繰り返し返した。昭和の時代そのものが、時代の中で歯をくいしばって、血をにじませ、いざつてきたこの時間がすべて夢であったなら。あたしはね、あたしは時代に逆らって激しい夢を見る。別な自分を探していたの。

間。

王子

時子、こっちに来てごらん、この火の側へ。

二人、暖炉の前に並んで座る。

炎に照らされた王子の横顔。

それは、前とは変わっている。

時子

……

時子の表情が変わる。

王子
時子

思い出したかい？

……草一郎さん……

王子、バサリと衣裳を剥ぐと、ノラ着姿に変身する。余りにスピーディーな変身に恐怖さえ覚える観客達。

草一郎

僕が死んで、余りに長い時間が経ったから、君がもう忘れてしまったかと、ドキドキしたよ。

時子

半世紀は経つかしら。

老女と童女を行き来する不可思議な時子。

草一郎

君は確か二十三、僕はまだ二十六歳だった。

時子

十六であなたと一緒にになって七年目の冬、あの年はいつにない豪雪で、平家の窓も雪にふさがれ、昼でも暗い冬でした。

草一郎

一郎と二郎は元気だろうか？

時子

二人とも死にました。子供は、あなたが死んでから生まれたアツ子だけ。

草一郎

女の子が生まれたのか……

時子

丈夫で働き者の、農家をささえるにふさわしい、りりしい娘です。

草一郎

君に似たんだね。

時子

ええ、私に似て損な女です。

草一郎

丈夫が一番じゃないか……

時子

体が丈夫でも心までが丈夫だとは限りません。それを世間は知らないのです。言葉の少ない丈夫な女は、いつも牛や馬みたいに扱われがちです。甘えを知らない女に対してなんと世間の無慈悲なことか。

時には泣いてだだをこね、咳込みながら寝巻姿で現われて、「私、低血圧なの」なんて一オクターブ高い声で世間にうるんだ目を向ける、そんな不健康さがあつたなら。そんな暮しが許されたなら……。

……時子……

草一郎
時子

あなたはちつとも変わらないのね。

林を越えた高台にある小学校が火事になった時、三年生の下の子が心配で、二人の妹の手をひき、末の子をおぶって、とるものもとりあえず駆けつけた時、ちょうど青年団が集って、消火作業の真最中だった。あなたはノラ着姿のまま、大きな声を張りあげ、テキパキと指示を出し、逃げ遅れた子供がいなかどうか、まだ消え切らない炎が踊る中、消防士の止めるのもきかず、どんどん階段を駆けあがっていったわ。次にあなたが姿を現わすまでのあの時間、長い長い、黒い時間。

白目をむいて失神したてんかん症の横田のビンちゃんを背負ったあなたが煙の中に見えた時、あたしはおんぶした赤ん坊のこともつい忘れて地べたにへたりこんだつけ。スズで真黒になったあなたが、誰かに手を振って、白い歯を見せた時、あたしはあなたを、ノラ着姿の王子様だと思いました。

そんなあなたとの縁談が持ちあがった時、あたしは身にあまる幸せで、このまま死なせてほしいと思っただけ……。

草一郎

僕だつてそうさ。

小学校の窓の下で、むずかる赤ん坊をあやししながら、毎日、教室の中の生徒達が朗読する声を、きき、一緒に口唇を動かす君の顔。そして、短い着物のスソからのびた黒光りして形良くしまった細い足。

校庭を囲んで僕は向い側の教室からいつだつて君の姿を見つけてた。

いつだったか、秋の昼下がりに、一度だけ、君は見なれないつばき模様のあざやかな色の浴衣を着て、その日だけはたった一人で、神社の前を歩いてた。僕がそつと後からつけているのに君は気付かない。

神社の裏手の、小さなおじぞうの前でしゃがんだ君が、手に持ったりんどうの花をそなえ、手をあわせて何かつぶやくのを、僕は息を殺してじつと見ていた。

僕らが手入れを忘れ、肩から雑草のはえたおじぞうの、頭のクモの巣をはらい、顔をだいじそうになでる君の指先は、子供の手にしては黒くふしくれだち、母親のような厚みがあった。

振り向いた君の目に涙が光っていたので、僕は声を出しそうになったけど、つばき模様があんまりあざやかだったので、もう一つの別なつばきに露が光ったように見えたものだった。

父が軽井沢から送ってくれた、唯一の浴衣でした。おばちゃん達の手前、こつそり一度だけ、あの時一度だけ袖を通して見たんです。誰かに見せて、自慢したくとも、術もなく、おじぞうさんに……あなたが見てくれていたんですね。……

時子

草一郎

君のことは何だつて知ってたさ。

時子

何だつて？

草一郎

ああそうさ、何だつて……

時子

……

草一郎

でも死んじゃったじゃない。死んじゃったじゃない。死んじゃったじゃない。

時子

……

草一郎

ほんとに変よね、あたしが七十になっても八十になっても、あなたはいつだつて、あ

時子

なたはずうつと二十六。いつだつてあの時のまま……

草一郎

こんな若僧に、時間の重さが判つてたまるか！女の道程が判つてたまりますか！

時子

草一郎はほえんで立っている。

草一郎

風が吹く、風に飛ばされて音楽が聞こえてくる。草一郎、時子を背中から優しく抱

時子

くように手を取り、尊いような、懐かしいような、故舞踏会の踊りを踊り始める。

草一郎

初めはゆるく、そして、雄々しく。

時子

ひとしきり踊った後、二人、絵画のように静止する。

草一郎

二人の踊りの途中、みどりが階段をあがってきていた。

時子

良き箇所で起きて時子達を見つめていたソラリスに気付いたみどり、急いで駆け寄

草一郎

る。

みどり ちよつと、ちよつと、ちよつと。

ソラリス ……

みどり 下、下、下。

ソラリス 何ですか……

みどり ちよつと起きてよ、みんな、起きてよ。

ソラリス 起きてつて、あんたが眠らせたんでしょ？

みどり いいから起きて、どつかに塩水ないかね。

ソラリス 何すんの。

みどり 砂出しするのよ、そしたら起きるでしょ。

ソラリス アサリじやあるまいし。

みどり あんたなんで起きてんの？

ソラリス ここに来た時、暗示にかかったんだよ、オネシヨするなつて。子供は暗示に弱いだろ？

みどり しそうになつて目が覚めちやつたんだよ。

みどり ここはどこ？

ソラリス どうしたんだよ。

みどり 地下室に降りていったら、ヒタヒタ水の音がするの。ずいぶん長い階段だった。マツ

チをすつて下まで降りていくと、部屋中に水がたまつていて、小舟のように浮かんだ

ユリカゴがいくつもいくつも漂つてるの。中を見ると、中を見ると……色とりどりの

花々に埋もれた少女達が、横たわつていて、眠つてるみたいになつて、でも誰も

息をしていなかった。

遠山

（突然）みんな待っているんだよ。この別荘の地下室は湖の底に通じている。幾万幾億の忘れられた少女達が、いつか目覚める時を待ち、花々の生命に助けられながら、夢を見続ける。私と兄貴はそんな少女達の夢を守る別荘番なのさ。

ソラリス

急に思いついたように言うなよ。初めに言えばいいじゃないか！

遠山

秘密だったんだよ。誰にも犯されたくない、神聖な場所だもの。誰にも言いたくなかったが、侍女のダーマに知られてしまった。（とオーバーに残念がる）

ソラリス

ところであんたなんで起きてんのよ。

遠山

砂出ししたんだ。こんなこともあるうかと携帯用の砂出し目薬を持ち歩いていて良かった。

ソラリス

眠っているのにどうやってさしたんだよ。

遠山

兄貴だよ兄貴。私が眠ると、死んだ兄貴の意識が体に宿るんだ。

ソラリス

便利な兄さんだな。

遠山、バラ子とユリ子と使者に目薬をさす。

三人、目をさます。

三人、起き上がって構える。

三人

ダーマはいずこ！

みどり

かんべんしてよ。それどころじゃないんだから。この下に、下に。

遠山

バラ子さん、ダーマにアレを見られたんです。

ソラリス バラ子さん達も地下室のことを知っていたんですか？

バラ子

ユリ子

……

みどり やだ、おばあちゃん、こんなとこで何してんの？

時子、草一郎の手をはなれ、前のめりにくずれ落ちる。
風が吹き、草一郎、粉と消える。

時子 あなた……あなた……

ソラリス 父ちゃん、父ちゃん！

時子 アツ子、父ちゃんに会ったかい？

ソラリス 母ちゃん、あれは風だよ。ただの通り過ぎた風だったんだ。

バラ子

ユリ子

あああ……

ソラリス どうしたんです？

バラ子 ダーマが握っていた鍵を……今……

みどり 何よ。

ユリ子 おばあちゃんと呼んだでしょ？時子さんのことおばあちゃんて……
みどり だっておばあちゃんじゃないよ。

時子、老女のように縮こまり、立っていられなくなる。

バラ子 過ぎ行く時にはさからえないと、人生に見切りをつけなければならぬと、残酷に、

死の予兆を伝える言葉。

ユリ子 少女の完全なる死を匂わせる、暗号。私達には禁句の言葉。
二人 よくも言ってくれたわね。

と二人も徐々に縮こまっていく。

バラ子 やつと目を覚ましたのに……

ユリ子 また、日のささない地下室で凍ったままにいるなんてたえられないわ……

と、地下より少女達の血の凍るような物悲しいため息が聞こえてくる。

遠山 少女達だ……貴様の言った一言でこの様だ。バラ子様達の意識に共鳴して、どんどん

ソラリス 心がなえて行くんだ。貴様、とんだ悪玉だ。早くなんとかしないと。どうすればいいんです？

みどり おばあちゃんをおばあちゃんて言って何が悪いのよ！

遠山 まだ言ってる！

ソラリス 時子さん、しっかりして下さい。遠山さん、時さんがひどく苦しそう、お兄さんの気

でなんとかありませんか？

遠山 それどころじゃないんだが……

と砂袋の砂を目にふりかけて、遠山立ったまま振り始めると、コブが消えて、兄貴の意識が宿り、別人となる、これは驚くべき早さで行われる。

どれどれ、私にまかせなさい。

と時子の体に手をかざし、

ウウム、だいぶ弱っている。手のほどこしようながない。私の気も、寿命にはかてない。

ソラリス そんな……

別人の遠山 少しの間眠らせて、様子を見ましょう。

と時子の頭に手を置いて、お経かなんかを唱える。
眠る時子。

こちらも苦しそう。

とバラ子とユリ子にも気を与える。

そして地下室の入口にも両手を使って気を注ぐ。

少女達のうめき声静まる。

ソラリス すごいなあ、お兄さん……

別人の遠山 それではさようなら。

ソラリス もう行っちゃうんですか？

別人の遠山 これ、簡単なようですつごく疲れるんです。それではおなごりおしゅう！

と、携帯用砂出し目薬をさす。

コブがもどり、元の遠山に変わる。

遠山 どうでした？

ソラリス さすがのお兄さんでも手のほどこしようがないらしく、今、みんな眠っています。

みどり 悪いことしちゃったのかな。(使者に)あんたさつきから黙ってないで何とか言つてよ。

使者

あたし、あたし、まだ若くてさあ、年寄りの痛みとかそういうの、判らない訳よ。あんたみたいに喋って失敗するより、黙ってた方が利口じゃん。

時子が眠っていた辺りから姫君現わる。

あつ！姫君。そうだ、すっかり忘れていた。一緒に月に帰りましょう。

窓の外には雲間から煌々と輝く大きな月が見えている。

ソラリス

時子さんが眠ったから、またお姫様が甦ったんだ。お姫様が月に帰ってしまったら、時子さんや、地下で眠る少女達はどうなってしまうのかな。

使者

生物達が、月によせる永遠の愛がある限り、彼女達の思いもまた、月の上で報われるでしょう。

ソラリス

少女達はみんな、月に帰るのを待っていたんですか？

使者

誰のものでもあり、誰のものでもない月の、そんな月へのつきせぬ思いがある限りは。

ソラリス

それじゃ、お姫様と一緒にみんなみな果てなしの闇へと向かって行くんですね。

使者

ええ。でもそのためには少女らが目覚めなければ……忘れられた少女達を、思い、愛する心がなければ。私がお連れできるのはこの姫君ただ一人。

ソラリス

でも、時子さんは……

姫

坊っちゃん、お判りでしょうが、この私は時子でもあるんです。初め私はそんなことにさえ気が付かぬ、童話の中の愚かなお姫様にすぎませんでした。さつき何度か入れ替わり、時子の悲しいナルシズムを知りました。自分で自分を抱くようなそんなギリギリの心情を、この血が、この息が知ったのです。時子が思い描いたこの体、ないところより生まれたこの私自身を、私は信じられるようになったのです。私はここにいますよね。

ソラリス

はい。

姫

だから私が、時子なんです。

使者

それじゃ参りましょう。

遠山

この少女達はどうしましょう。

使者

仕方ありませんね、置いて行きます。

遠山

そんな……

みどり

お願いです。あの子達も、連れてって、ここに眠るバラ子さん達も。

ソラリス

なんだよ、急にいいもん役の目になっちゃって。

みどり

あたし、見てしまったんです。地下室で、湖の底で眠る乙女達のゆりかごの中に、このあたしが……あの頃のあたしが息をしないで眠っているのを。半分クモの巣がかかってホコリにまみれていたそれが、あたしがあつと声をあげた途端、頬がホンノリ色付いたように見えました。あたしの中の少女が月にむかえば、いつだって月の方角に、今のあたしではない、何かもつと光るものを見ていられるはずなもの。

ソラリス

あたしのゆりかごはなかった？

みどり なかったわねえ。

ソラリス なんだろう。

遠山 恋に恋する夢見がちな少女のゆりかごだもの。

ソラリス 今は少年でも、昔は少女だったはずだがなあ。

みどり あんた恋したことないんじゃないの？

ソラリス ……ない。

みどり なんだか、あんたが一番可哀そうねえ。恋も知らずに、子供生んじゃない。

ソラリス そうか、だから少女に変身できなかったのか。

遠山 今からだよ母ちゃん、まだ六十前なんだから。

ソラリス そうよねえ。見合いでもしてみようかしら。

遠山 そうだよ母ちゃん、毎月公民館で色んなクラブやってるじゃないか、母ちゃんもう働

かなくていいから、恋でもなんでもどんどんしろよ。

ソラリス そうだねえ。恋ぐらいしなきやつまらないもんねえ。

みどり お願いです！連れて行って下さい。

ソラリス
遠山 } でも、どうやって！

と、三人、もう意識が変わっている。

使者 くやしいけれど、記憶の風に頼るしかないようだ。

三人 え？

使者 呪いをかけた張本人に、時の呪縛を解いて貰うのです。

ソラリス 風の王子はどこだ。

王子 ここだ。

と、再び王子の衣裳で時計の跡より現われる。

ソラリス どこ行ってたんだよ。

王子 さつきからここにいたよ。ここでビュービュー吹いてたよ。風なんだから、目に見える方がおかしいんだよ本来は。

ソラリス ……

王子 何見てるんだよ。

ソラリス ……父ちゃん……

王子 気味の悪いガキだな。

みどり さつきからいたんなら事のしだいは知っていますね。

王子 ああ。

みどり お願います。あたしのピンクのチューリップも連れてって！

王子 オバサンには弱いなあ、そんな目をされると、つつい電車席なんかもゆずっちゃうんだよねえ。

使者 この人のさっきの一言で、みんなもうだいぶ弱っていますから、さ、早く。
王子 時に身を任せ、記憶をたどり、その時々の実現を打ち、思いを寄せ、いつくしみ、越え行きて未来を信じるなら。

一同 はいっ。

遠山 鉄腕アトムの世界になってきたな。

ソラリス 僕は手塚さんと一緒に地上に残るよ。死んでも消えない少年と一緒に。

王子 時子、君が連れて行くんだ。君の血肉を宙に広げて。

と王子、時子の手をとる。

姫（実は時子） この手をしっかりとりにぎってくださいね。

王子 ああ……思うんだ時子、自分から他へ、他から聞へ。体を塵にして思いを焦がせ。風に身をまかせるんだ。

時子、手をとられたまま両手を広げ、不思議な笑みをたたえて瞳をこらす。
と、宙に浮かんだ月に向かって、無数の花々が飛び散って行く。

一同 ああ！

バラ子とユリ子もゆっくりと起きあがり、そして窓際に立ち

無邪気に手を振ったりしている。

王子 さあ、飛ぶよ。

時子 ええ……

ソラリス 母ちゃん！

王子、時子の手を取り、風に乗って消えたようだ。

見守る一同、はためくカーテン。

ソラリスを残して舞台暗くなり、やがて真暗になる。

明るくなると、元の病室。

立花、時子の手をとって脈をはかっていた。

アツ子 母ちゃん！

立花 御臨終です。

一同 ……

君恵 午前〇時三分です。

アツ子 母ちゃん……

タバコの吸い殻がいつぱいたまった空缶を持って、みどり、なおもタバコを吸っている。

茂男 みどりさん、そんなに吸っちゃ体に毒ですよ。

みどり うるさいな、人の勝手でしょ。

茂男 だって子供でもできたら。

みどり いいかげんあきらめてよ。子供なんてうるさいばかりなんだから。ほど良く大きく

育った奴を、他からくすねてきた方が楽でいいでしょ？そうしょ。

そんなカンタンに……

あ……御臨終なんですけど。

判ってますよ。

茂男 いえね、この人、どうしていいか判らなくなると喋ってごまかすタイプなんですよ。

悪意はありませんから悪意は……。

君恵 あなたも喋ってますよ。

茂男 ええ、私は気が弱いだけで、別に他意はありません。

アツ子 母ちゃん……死んじゃったよう……母ちゃん。

立花 見て下さい。安らかな顔してますよ。静かに……笑ってるようじゃありませんか。

みどりのお腹がぐうと鳴る。

一同、みどりを見る。

みどり 仕方ないでしょう、朝から食べてないんだもの。とるものもとりあえず出てきた訳だ

茂男
みどり
から……悪い？悪くないでしょう？あんだだつてスイてんでしょ？
忘れてましたよ、そんなこと……

みどり
へん、いい子振っちゃつて。お義母さん、おばあちゃん、家運ぶ前に、何か食べる？

お通夜とかお葬式とかで、これから食べる時間ないよ。あんだ、何かとろうか？

茂男
みどり
病院に出前とるの？

アラ、ダメなの？

立花
アツ子
じゃあ、私達はこれで……係の者を呼んで参りましょう。

アツ子
立花
先生、まだもう少し下さい。(君恵に) あなたも……

立花
アツ子
え？

何だか心細くて……まともな人の声を聞いていないと不安で。

みどり
あら、あたし達まともじゃないっていうの？

茂男
みどりさん。

アツ子
いえ、あの、お医者さんとか看護婦さんて、白い制服のせいなんでしょうか、まとも
って感じで、すごく落ち着くとこあるんですよね。心を開きたくなる、強いものを感じ
るんです。病気知らずの私ですから、特にあこがれが強くて。

君恵
何か判りますね、その感じ。あたしもそれでこの仕事選んだような気がします。

立花、窓を開けて外を見る。

立花
あ、月だ。

君恵 あらホント。いい匂いね。庭の木の花が香るのよね。

立花 雨があがつていたんだな。

君恵 やだ、とつくよ。

みどり

ほんと、ジメジメして嫌な季節よね。お通夜も葬式も雨だったらどうしよう。ねえ、傘袋とか、番号札なんか用意しないでいいかしら。みんな黒だから後で間違えちゃったりして面倒よね。

茂男 そんな、小劇場の芝居じゃあるまいし。

みどり お義母さん、もうそろそろ引き上げましょう。家に運んで貰って、それからゆつくり

しましょうよ。

茂男 母ちゃん、今夜、おばあちゃんと一緒に寝るといいよ。最後のお別れだもんな。

窓から風が吹く。

立花 風だ。

君恵 いい風。

月光が時子の抱いていた「花物語」に注がれる。

窓の上の方から、バラ子とユリ子が現われて窓から中に入る。

アツ子

あなた達は……

バラ子
ユリ子
バラ子
ユリ子
アツ子
ユリ子

時子さん、時子さん、起きて、起きて。
ユリ子 参りましょう、時子さん。
バラ子 皆さん待っていてよ、時子さん。
ユリ子 ソラリス、あんたは地上に残るのね。
アツ子 ええ。
ユリ子 それなら時子さんを見送ってね。

時子がグイと起きあがったかと思うその瞬間に、奥の壁が割れると光る月の上に時子が座って手を振っている。

バラ子とユリ子、駆け出して消える。

そして時子の両ワキにその手をとって現われる。

さざ波の音が聞こえてくる。

アツ子、「花物語」を持って雄々しく立ち上がる。

アツ子

誰のものでもあり、誰のものでもない月に、目覚めた母がいる間。僕はこの地上で、起きて生活して行きます。母がようやく目覚めたように、僕は僕の中の何かが終って、一つの長い夢からさめたような、そんな気がしているんです。僕の中にひそむ、別の静かな少年が、いつか饒舌に世界を語る日がこないとは限りません。僕はこの地上で、月の上の果てしない夜を思い、昨日とは違った別の新しい言葉を、書きつづって行こうと思うのです。

波音、高なる。

……僕の海だ……

煙草に火をつけるみどり、生活を越えたある表情を残す。
時子、バラ子、ユリ子の笑い声。
風音と音楽の中、時子のイメージが宙に広がる

END

89年日本現代劇作家新作シリーズ第2弾

月の上の夜

【公演日程】

1989年6月11日(日)～1989年6月25日(日)

会場 SPACE PART^{co}

【スタッフ】

作

渡辺えり子

音響

深川定次

演出

大間知靖子

衣裳

出川淳子

美術

朝倉摂

舞台監督

明石伸一

照明

室伏生大

企画制作

パルコ



【出演】

時子・姫……………吉行和子

アツ子・ソラリス……………神保共子

みどり・侍女マーダ……………田根楽子

茂雄・遠山……………花王おさむ

立花・王子……………諸角憲一

君恵・月よりの使者……………玉城美璐

バラ子……………長野里美

ユリ子……………野口早苗

作成・発行元

おふいす300

発行日 2016年9月18日

印刷所 ねこのしつぽ

表紙デザイン 十倉彩子

協力 洞口菜穂

写真提供 吉行和子

著作 渡辺えり

☆この戯曲を上演する際は、オフィス300に御一報願います。

★オフィス300 TEL：03-6804-4838

☆メールアドレス：mail@office300.co.jp